

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 5 月 17 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11752

研究課題名(和文) 認知症高齢者の終末期ケアを担うケア専門職に対する実践能力育成システムの開発

研究課題名(英文) Development of a system for building the practical skills of care professionals that provide end-of-life care for elderly people with dementia

研究代表者

桑原 万由子(平松万由子)(Kawahara(Hiramatsu), Mayuko)

三重大学・医学系研究科・准教授

研究者番号：50402681

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、認知症高齢者終末期ケア実践における現状と取り巻く課題を明らかにした上で、特に生活の場における認知症高齢者の終末期ケアを担う人材の実践力育成のあり方を検討することを目的とした。

最初に、認知症ケアに熟練したケア専門職(看護職、介護職)を対象に、認知症高齢者の終末期ケアに必要な力を明らかにするために聞き取り調査を行った。次に、直接生活にかかわる機会が多い介護職に焦点を当て、認知症高齢者終末期ケア実践における現状と課題を明らかにするための質問紙調査を行った。これらの結果を踏まえ、介護職を対象とした研修を実施し、評価した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「認知症高齢者が住み慣れた希望の場所で最期まで生きること」を生活の場で支える機会が多いケア専門職に焦点を当て、認知症高齢者終末期ケア実践における現状と取り巻く課題を明らかにした上で、特に生活の場で認知症高齢者の終末期ケアを担う人材の実践力育成のあり方を検討した。今回は介護職のみの介入となったが、今後は、多職種合同で終末期における共通のテーマで研修会をするなど、本研究の結果を様々な方向に発展させていきたいと考えている。このような取り組みにより、住み慣れた希望の場所で認知症の人が質の高いケアを受けながら最期まで生活を送ることに寄与することができると思われる。

研究成果の概要(英文)：This study was designed to clarify the status and challenges of the practice of end-of-life care for elderly people with dementia and to discuss the direction of building the practical skills of human resources that provide end-of-life care for elderly people with dementia, especially in their daily lives.

First, care professionals experienced in dementia care (nurses, care workers) were administered an interview survey to identify the competencies required for end-of-life care for elderly people with dementia. Next, care workers who had many occasions to be directly involved in the daily lives of elderly people with dementia were administered a questionnaire survey to clarify the status and challenges of the practice of end-of-life care for elderly people with dementia. Based on the results from these surveys, training that targeted care workers was provided and assessed.

研究分野：高齢者看護

キーワード：終末期ケア 認知症ケア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

認知症高齢者の終末期ケアにおいては、生活の場での認知症ケア経験の乏しい看護職・終末期ケア経験の乏しい介護職などケアに関わる専門職の認知症・終末期ケアの力量不足、ケア専門職の協働に関する課題、継続ケアに関する課題、医師の協力体制の促進など課題は多い。そこで、本研究では「認知症高齢者が住み慣れた希望の場所で最期まで生きること」を生活の場で支える機会の多いケア専門職に焦点を当て、認知症高齢者終末期ケア実践における現状と取り巻く課題を明らかにした上で、特に生活の場で認知症高齢者の終末期ケアを担う人材の実践力育成のあり方を検討したいと考えた。

2. 研究の目的

「認知症高齢者が住み慣れた希望の場所で最期まで生きること」を生活の場で支える機会の多いケア専門職に焦点を当て、認知症高齢者終末期ケア実践における現状と取り巻く課題を明らかにした上で、特に生活の場で認知症高齢者の終末期ケアを担う人材の実践力育成のあり方を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、3段階で実施した。第1段階として、ケア専門職の認知症高齢者終末期ケアにおける実践力に関する調査を行い、生活の場で認知症高齢者の終末期ケアにかかわるケア専門職が今後どのような力をつけていく必要があるのか、どのような力を高めたいと考えているのか、また現場での課題について明らかにしたいと考えた。そこで認知症高齢者の終末期ケアを担う人材の実践力育成のあり方を考察するために、生活の場における認知症高齢者ケアに精通したケア専門職として、様々な場で認知症ケアに関わり認知症ケアに精通する看護職、介護職を対象としフォーカスグループインタビューを行った。

第2段階として、生活の場における認知症高齢者の終末期ケアにおいて課題を多く抱える介護職に焦点を当て、介護職が今後どのような力をつけていく必要があるのか、どのような力を高めたいと考えているのか、また現場での課題について明らかにするため、介護職を対象とした質問紙調査を行った。

第3段階として、第1段階、第2段階の調査の結果を踏まえて研修プログラム内容を検討し、介護職を対象とした終末期ケアの研修を実施し、実施後アンケート調査を行った。

4. 研究成果

第1段階で行ったインタビューでは、認知症ケアに精通した看護職として、認知症看護認定看護師、認知症ケア専門士資格を持つ看護師、訪問看護師、認知症ケア専門士資格を持つ介護職それぞれについてグループインタビューを行った。得られたデータは、「認知症ケアの基本的な捉え方」「終末期ケアの捉え方」「認知症の終末期ケアの特徴」「終末期ケアにおいて必要な他職種との連携」「終末期ケアにおけるスタッフ教育」「実践する上での難しさ」の内容に整理された。終末期ケアにおけるスタッフ教育では、死生観を育むための様々な考えに基づく他スタッフへの働きかけや配慮が語られた。対象は、認知症高齢者の終末期ケアを基本のケアや認知症ケアの一部であると捉えており、その多様性の中で様々なケアの配慮を行っていた。認知症高齢者の終末期ケアを担う人材育成の在り方として、認知症高齢者の終末期ケアに特化した研修を行うことも知識・技術を習得する上では必要な内容ではあるが、認知症の基本的なケアを習得する中で育まれていく内容が多くあることが示唆された。結果より、看護職は、終末期ケアに関して明確な考えを持っていることが伺えた。しかし介護職は、生活の場における終末期ケアに関して直接ケアを行う機会が多いと考えられるが、認知症ケアに精通した対象のインタビューにおいても、具体的な課題や思考の特徴、どのようなことに取り組むべきかの方向性を見出すことが難しかった。そこで次の段階では、介護職の課題や考え方の特徴をさらに明確にすることに焦点を当てた。

第2段階として、介護職を対象とした記述式質問紙調査を行った。調査期間は2018年2~3月である。様々な場でケアを行う対象者の意見を反映したいため、勤務場所を特定せず、1県の介護福祉士会に所属する全会員965名を対象とした郵送による無記名の自記式質問紙調査を実施した。内容は、第1段階で行ったインタビューで明らかにされた内容および文献を参考に構成し、対象者概要(性別、年齢、資格、勤務場所種別、仕事内容等)、認知症ケア経験、終末期ケア経験、認知症ケア、終末期ケアに関する学習状況、認知症ケアに対する認識、終末期ケアに対する認識等について聞いた。結果として、110名より回答があり回収率11.4%、有効回答率100%であった。対象者の概要として、女性86名(78.2%)、資格では、介護福祉士を持つものが108名であり、合わせて介護支援専門員の資格を持つものが30名であった。勤務場所では施設が最も多く57名であり、次いで訪問サービス15名、通所サービス14名であり、病院は5名であった。仕事内容では直接的なケアの提供を行うものが87名と最も多く、現場管理24名、経営管理8名であった。

認知症ケアについては、9割が経験ありと回答し、7割以上が認知症ケアを積極的にしたいと回答した。認知症ケアに対する難しさの認識として、症状への対応の難しさや知識不足からくる困難さ、職場の環境による難しさによる内容が含まれた。また、知識不足を挙げるものも多数いた。学習したい内容は、基本のケア、認知症疾患理解・治療、疾患による関わり方、技法

の習得、その他に整理された。

終末期ケアについては、6割が経験ありと回答し、約5割が積極的に終末期ケアをしたいと回答した。学習したい内容は、医学的知識・ケア、苦痛支援、精神的ケア、具体的なケア方法、連携について、死後のケア、その他に整理された。

認知症終末期ケアに対する思いの自由記述では、死生観を含んだ自己の考え、意思決定支援や尊厳の保持などに対する疑問や葛藤が多くみられ、倫理的な課題を含む事柄が多く、倫理的な思考や知識により考えが整理される内容が多いことが特徴としてあった。また、終末期において認知症であることは特別でないと考えているとの意見も複数あり、先の熟練者らのインタビューでも同様の意見が聞かれていた。

回答者の特徴として、生活の場での終末期ケアを実際に実践する可能性が高く、本テーマに関心の高い集団であることが伺えた。

第3段階として、第1段階、第2段階の結果を基に高齢者看護の専門家、認知症ケアの専門家、介護職の有識者と検討し、研修プログラム案を作成した。配慮した点として、介護職は終末期ケアの基礎的知識の習得を希望しており、それを基盤とした研修内容とすること、その中の1要素として認知症を持つ人の特徴を踏まえた支援の在り方を盛り込むこととした。その中でも、特に高齢者の終末期ケアの考え方や、大切にすべきことに重点を置き、その上で苦痛支援などの直接的なケア内容を組み込んだ。ケアの倫理に関する知識提供と議論も組み込む必要性が検討されたが、対象の準備状況を考慮し、今後アドバンスの内容として研修に組み入れ、段階的な構成にすることを展望として検討した。構成として、講義と演習を組み合わせ、知識を得た後、今後介護職としてどのような関りをしていきたいかについて議論する場を設けることとした。研修には質問紙調査を実施した1県の介護福祉士会に所属する会員のうち希望者30名が参加し、終了後の評価として満足度は全体に高い傾向にあった。やや不満足と回答した者では、理解が難しかった、もっと専門的な内容を知りたかったという両極の意見が見られ、基礎的な内容から発展的な内容まで、対象の力量に応じた研修の選択が可能となるような段階的な研修の必要性が示唆された。一方、今回は介護職のみの介入となったが、今後は、多職種合同で終末期における共通のテーマでの研修プログラムも作成するなど、本研究の結果を様々な方向に発展させることが必要であると考えており、それにより生活の場で終末期を生きる認知症高齢者に関わる専門職が本人・家族と共に一つの目標に向かっていくことのきっかけになり得るのではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 1件)

1) 平松万由子、磯和勅子、服部由佳、北川亜希子：認知症ケアに精通した看護職の認知症高齢者の終末期ケアに対する認識とケア実践、日本看護科学学会、2018.

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：磯和 勅子

ローマ字氏名：(ISOWA, Tokiko)

所属研究機関名：三重大学

部局名：大学院医学系研究科

職名：教授

研究者番号(8桁): 30336713

研究分担者氏名：北川 亜希子

ローマ字氏名：(KITAGAWA, Akiko)

所属研究機関名：三重大学

部局名：大学院医学系研究科
職名：助教
研究者番号（8桁）：20422876

研究分担者氏名：服部 由佳
ローマ字氏名：(HATTORI, Yuka)
所属研究機関名：三重大学
部局名：大学院医学系研究科
職名：助教
研究者番号（8桁）：30705405

(2)研究協力者
研究協力者氏名：白澤 政和
ローマ字氏名：(SHIRASAWA, Masakazu)
研究者番号（8桁）：20094477

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。